

○ 目次

1. はじめに
2. 英語の歴史
3. 流入したもの
4. 五文型

1. はじめに

今回から本格的に授業にとりかかります。最初に扱うのは**五文型**です。準備講座で扱いましたね。今更…という感じかもしれません。とはいえ、これが英語を学ぶ上でもっとも重要なポイントなのです。それを最初に扱うのですから、出し惜しみなしです。

さて、準備講座でも、さんざん「五文型はとても大事！」という話をされたのではないかと思います。英語のすべては結局五文型に戻ってくると。だから大事なのだと。教えられてのではないのでしょうか。

ですが、どうしてそんなに五文型は英語にとって大事なものとなっているのでしょうか。その説明はおそらくされないと思います（多分高校でも扱わないでしょう）。ですが、ここがわからないということにモヤモヤがつのってもおかしくありません。かくいう私もここがわからず、高校生の頃は五文型を軽視していました。こんなんわかんなくても何とかなるしーってね。

しかし、実際は逆なのです。五文型があるから、他の文法が理解できるのです。だから、五文型は必須なのです。そのためにも、皆さんには五文型の重要さを理解してもらいたい。

それを理解するためにはいろいろな方法があると思います。その中で私は、英語の歴史を説明することによって五文型を説明する、という方法をとりたいと思います。おそらくこれは考えられる限り最も遠回りな方法です。とはいえ、遠回りをするからこそ、その本質が見えてきます。何より五文型は英語のなかで最も重要な点、これから英語について何を学んでも付きまといわれる、本質といってもよい部分です。つまり、急がば回れ、ということです。

2. 英語の歴史

さて、これから英語の歴史を語っていくわけですが、これを完璧に語ろうとすると、これだけで授業 2 回分くらいのボリュームになってしまうので、年表でチャチャッと行こうと思います。穴埋めを用意しておいたのどうめながら行きましょう。

○年表

B.C 4000～6000 頃

ロシア南部、あるいはアナトリア（今のトルコ近辺）でインド・ヨーロッパ祖語が誕生。
以後、民族移動と変化を伴いながらヨーロッパやアジア西部～南部の各地に拡大。その後ヨーロッパに限れば、イタリック語派、ゲルマン語派、スラブ語派、ケルト語派、ギリシア語派などに分かれる。

B.C 750～200 頃

ケルト人がブリテン島に到来。ケルト文化のもと王国を築く。←（ケルト）語派

B.C 55～54

ユリウス・カエサルによる二度のブリテン遠征。ローマ人の流入開始。←（イタリック）語派・（ラテン）語を使用。

A.D 280 頃

（サクソン）人のブリテン島略奪開始。←西（ゲルマン）語派

A.D 401～409

ローマ軍団のブリテン島撤退。

A.D 456

ブリテン島に流入した（アングル）人と（サクソン）人が初の王国を建国、土着のブリトン人やケルト人を辺境へと追いやり始める。←（古英語）の使用が始まる。

A.D 750

叙事詩『ベオウルフ』成立←貴重な（古英語）の史料。

A.D 835

（ヴァイキング）がイングランド南部に侵入開始。←北（ゲルマン）語派

A.D 9～10C

デーン人の軍隊をアルフレッド大王とその息子エドワードが退けるも、エドワードの死後再び（ヴァイキング）が台頭する。またアルフレッド大王は、記録を（ラテン）語ではなく英語で書かせ始める。

A.D 1013

（デンマーク）王クヌートがイングランドを支配する。

A.D 1066

フランス王に仕える（ノルマン）系のノルマンディー公ウィリアム征服王がブリテン島に侵攻し、アングロ・サクソン系のイングランド王ハロルドがヘイスティングズの戦いで戦死、イングランドはウィリアムのものとなる←（ノルマン・コンクエスト）

A.D 1203

ジョン王、イングランドのフランス領地を失う。

A.D 1339～1453

イギリスとフランスの間で（百年）戦争勃発。長期化するうちに農民一揆や（ペスト）の流行で封建領主層が没落し、王権が強くなる。このころ（中英語）が成立。

Ex. チョーサー『カンタベリー物語』

A.D 1473～74

（グーテンベルク）が発明した活版印刷術によって、はじめての英語で印刷された書物が出回り始める。←英語の綴りの標準化が始まる

A.D 16C

女王（エリザベス）I世の時代。（シェイクスピア）の誕生。←演劇の中でおよそ（3000）語の新単語を英語に導入。←ほぼ現代の英語が完成

A.D 16C～18C

イギリスの海外進出。Ex. （アメリカ）、（インド）、南アメリカ etc...。植民地への移民の流入。Ex. アフリカ系、ドイツ系、イタリア系、ユダヤ系 etc...。1775（アメリカ）独立戦争。←英語の分裂。

A.D 19C

発明の時代。1830年（鉄道）開通。1837年（電信）装置開発。1895年（無線電信）機開発。←情報伝達のスピードが加速。

A.D 1928

1879年に執筆が始まった『オックスフォード英語大辞典』完成。

A.D 1990

www（ワールド・ワイド・ウェブ）誕生。その後20～30年でインターネットが全世界的に普及する。

3. 流入したもの

ここまで年表を見たことで、皆さんは理解したと思います。英語が、さまざまな言語との出会いを経て現在に至っていることを。

そもその英語の源流はアングロ人やサクソン人（「まとめてアングロ・サクソン人」と呼ぶ）の話す西ゲルマンの言葉です。そこにまず、アングロ・サクソン人が追いやったケルト系の言語、その後侵入してきたヴァイキングの北ゲルマン系の言語、そしてノルマン・コンクエストで入ってきたフランス語や、その源流のラテン語と、次々に新たな言語との出会いを重ねていきます。このように流入してきた言語を少しずつ取り入れながら、英語は成立していきました。さらに英語がアメリカで使われるようになると、そこに移住してきた人々が、自分の母国語の語彙を英語に混ぜ込んでいきます。更にそのようにして新たに生まれた英語が、今度はイギリスに流れ込んでいきます。更に現代ではインターネットの普及によって、新たに生成された言葉が一瞬のうちに世界中に広がります。

このプロセスを見ると、次のように考えられます。すなわち、英語はその成立の過程で様々な他の言語を受容せざるをえなかったが、逆にそれによって、さまざまな人々に受け入れられやすい形に仕上がっていったのではないかと。

この「さまざまな人々に受け入れられやすい形」こそが、今回扱う五文型なのだ、と考えられるように私は思います。では、それは五文型のどんな特徴に表れているのか。次で見いきましょう。

4. 五文型

形についてはすでに学習済みだと思いますので、この下に書いてみてください。

- ・ 第1文型 **SV**
- ・ 第2文型 **SVC**
- ・ 第3文型 **SVO**
 - ・ 第4文型 **SVO₁O₂**
 - ・ 第5文型 **SVOC**

これらのどこが「さまざまな人々に受け入れられやすい形」であるというのか、というのが問題です。

英語の源流の西ゲルマン語の特徴を色濃く受け継ぐ言語として、同じ西ゲルマン語から派生した現代のドイツ語が挙げられます。英語でいう五文型のようなドイツ語の重要な要素として、格変化が挙げられます。これは名詞に4つの格を設定し、それを冠詞で区別することで、日本語でいう「格助詞」（日本語の「てにをは」の一部）の役割を担わせる、ということです。つまりはどういうことか。次の空欄に、授業中に示す日本語を英訳して書いてください。

日本語：私はその本を読む。

英語

I read the book.

では、次に指示するように英語を並べ替えて、日本語訳してみてください。

日本語：その本は私を読む。

英語

The book read I.

これで意味は通じるでしょうか。おかしいですね。

ではこれをドイツ語にしてみるとどうなるか。こうなります。

ドイツ語

Ich lese das Buch.

入れ替えるとうです。

ドイツ語

Das Buch lese Ich.

実はドイツ語において、この二つは同じ意味として扱えるのです。もっとすごいのはこれです。

日本語：私は彼にその本を与える。

英語：

I give him the book.

これを例えばこう入れ替えるとうでしょうか。

日本語：私はその本に彼を与える。

英語

I give the book him.

これもとうでしょうか。

日本語：日本語にならない。

英語

Him give I the book.

おかしいことになりますよね。ではドイツ語なら？

ドイツ語

Ich gebe ihm das Buch.

Ich gebe das Buch ihm.

Ihm gebe ich das Buch.

実はこれ、どの形でも（ニュアンスは異なるけれども）同じ意味にとれるのです。

便利だと思いますか？そう思うかもしれないし、思わないかもしれません。とはいえどちらにしる、これには一つめんどくさい問題があるのです。

それは、名詞に性が設定されており、それによってつける冠詞やその変化が異なる、ということです。これは、他の言語を受け入れる体制を整えるには致命的です。なぜなら、新しく迎えた単語それぞれに性を設定しなければならないのですから。「そんな簡単じゃん」と思うかもしれませんが、これをめんどくさくする問題があります。それは、他の言語でも名詞に性が設定されている場合があり、それがゲルマン由来の考え方と食い違う場合がある、ということです。例えばドイツ語において「太陽」は die Sonne と書き、女性名詞となりますが、フランス語においては le soleil と書き、男性名詞となります。そして「月」はドイツ語では der Mond で男性名詞となり、フランス語では la lune で女性名詞となるのです。さらにドイツ語に残っている古いインド・ヨーロッパ語の特徴として、名詞の性として、男性・女性に加えて中性をつけるというものもあります。ここまでくると、名詞に性を設定する以前に、その性ごとの冠詞の格変化を覚えるのが面倒になります。面倒なことは、人に伝える上で大きな障害です。

だからこそ、歴史の中で英語はこういった面倒な格変化をほとんど捨てました（代名詞にのみ名残がある）。ですが、なんらかの形で格を表現する必要はあります。そのために選ばれたのが、従来冠詞で表現していた格を文中におけるその名詞の位置で表わす「五文型」だった、というわけなのです。